

生命は主のもの

石川 節子

黒田医師はおもむろに口を開かれた。「このままでは三ヶ月の生命ですね。でも、人工透析を受けると一年間の生存率は五〇パーセントです。一年間生きたら体が透析に慣れるので、三年間生きる可能性が出てきます。あなたはどうぞされますか」頭をなぐられた思いがした。医者と相談した結果、私は人工透析を受ける決心をした。私はもうすぐ死ぬと思うと悲しくって、ベットの中で泣いた。

岐阜から東京の神学校に来たのも、神様からブラジル宣教の重荷が与えられたからだ。しかし、人工透析を受けると、ブラジルに行けなくなる。神様はブラジルに重荷がなかった私を、重荷を持つように変えてくださり、家族の反対を押し切って神学校で学ぶようにしてくださいと思った。が、これは神様の導きでなく、私の思いであったのだろうか。神様は本当に生きて働いておられる方だろうか。私には神様がわからなくなった。

私は人工透析を受けるようになった。「神様のために働く」という希望を持って東京に来た。が、失意のうちに岐阜へ帰った。神様は本当におられるのだろうか。聖書の言葉は

本当だろうか。このことを知りたかったが、神学校で学んでいた私は誰にも聞く勇気がなかった。私には神様に祈るしかなかった。

岐阜に帰って一年たったある日、私は神学校で「私の生命をイエス様に献げます。どうぞみ旨のままに用いてください」と祈ったことを思い出した。私は自分の生命にしがみついていることに気がついた。私の生命はイエス様のものであったのだ。

岐阜に戻って十年たった。私たちの教団から宮園昭夫、和子宣教師がブラジルへ行かれることになった。私は日本で宮園宣教師たちのブラジル宣教を支えていくことになった。神様は私がブラジル宣教の重荷を日本で支えるために訓練してくださったのだ。神様は本当に生きておられる方である。感謝。